

感情状態とプライベート空間の7機能

— 場所利用を媒介として —

筑波大学大学院(博)心理学研究科 泊 真児

筑波大学心理学系 今野 裕之・吉田 富二雄

The relationship between emotional states and the seven functions of private space in terms of use of place

Shinji Tomari, Hiroyuki Konno and Fujio Yoshida (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The present study examined the relationship between emotional states and the seven functions of private space (Tomari & Yoshida, 1998a) in terms of use of place. Two hundred and seventy-four undergraduates completed a questionnaire concerning emotional states, use of place and the functions of private space. The major findings were as follows: (1) places where one can be alone alleviate the depressive feelings, irritation and feelings of restriction. (2) individuals use places where they can be anonymous when they are irritated. Path analysis indicated that individuals can use places to achieve certain functions of private space in response to their emotional states.

Key words: privacy, seven functions of private space, emotional state, use of places.

問 題

泊・吉田(1998a)は「社会的役割から離れて、他者の目を気にせずに自由に振る舞える自分固有の領域(時間や空間)」をプライベート空間と定義し、プライベート空間が持つ機能的特性の分析を行った。具体的には、先行研究や自由記述調査の結果を整理する中で、プライベート空間の機能を7機能に分類し、それぞれが個人にとってどの程度重要であるかを測定する尺度を作成した(泊・吉田, 1998a, 1998b)。それによると、プライベート空間の機能は、緊張解消・自己内省・課題への集中・率直なコミュニケーション・気分転換・情緒的解放・自己変身の7機能に尺度化され、さらに、これら7つの心理的機能は空間的な性質によって専有空間・共有空間・解放空間の3種類の空間に構造化されることが明らかにされた。すなわち、プライベート空間の7

機能には、まず、休息を取ってリラックスすることを意味する緊張解消、自己を見つめ直し混乱した状況や気持ちを整理する自己内省、そして課題や考え事に集中して取り組む課題への集中の3機能があり、それらは他者の存在がなく「(自分1人で)専有できる空間」の機能として構造化される。次に、親しい人との時間や空間の共有を意味する率直なコミュニケーションは、「共有できる空間」の機能として意味づけられる。さらに、散歩や買い物等によるちょっとした気持ちの切り替えを意味する気分転換、感情をありのままに解放する情緒的解放、そして普段の役割から離れて別の自己を演出する自己変身の3機能は、「(他者への気兼ねがない)自己解放できる空間」の機能として構造化される。これらの研究をもとに、泊・吉田(1999)はプライベート空間という心理的に意味づけられた空間が、実際の日常生活の中でどのように機能しているかを感情状

態や場所利用との関係をもとに検討した。具体的には、大学生が普段の生活の中で経験する感情や利用しがちな場所を取り上げ、プライベート空間の機能の必要度や確保度との関係について検討した。その結果、まず感情との関係については、抑うつ感・いらだちを感じているときほど、自己を見つめ直して混乱した気持ちや状況を整理(自己内省)したり、気分転換を図る時間・空間が求められることが分かった。また、忙しい・束縛されている等の拘束感を感じるときほど、気分転換や日常からの離脱(情緒的解放)を意味する「自己解放できる空間」の機能や、周囲からの影響を遮断してリラックスできる「専有できる空間」の機能を必要とすることが明らかとなった。さらに、率直なコミュニケーション・気分転換・情緒的解放・自己内省の機能が確保できている者ほど、抑うつ感やいらだちを感じることが少なく、専有できる空間や自己解放できる空間の機能を充たしているほど、無気力感・拘束感に悩まされることが少ないことを見出した。

次に、場所との関係では、毎日同じような生活を繰り返し生活空間が固定化(日常性の空間をよく利用)している人ほど気分転換を求め、率直なコミュニケーションや緊張解消を求める人ほど、居酒屋や友人の家等の「交友できる空間」をよく利用していることが示された。また、専有できる空間の3機能(課題への集中・自己内省・緊張解消)と気分転換・情緒的解放は、いずれも「1人になれる空間」で充たされ、率直なコミュニケーションは「交友できる空間」や「1人になれる空間」で行われやすいことを見出された。さらに、自己変身は旅先やディスコ等のいわゆる匿名的な空間や、居酒屋・カラオケハウス・行楽地等の一種の非日常的な空間で充たされていることが明らかとなった。

以上の結果より、第1に、感情状態に応じて利用されるプライベート空間の機能が異なること、第2に、生活空間内の様々な場所がプライベート空間の機能を充たすものとして意味づけられ、利用されていることが示されたと言える。しかしながら、この研究ではプライベート空間の機能と感情、及びプライベート空間の機能と場所利用の関係を検討するにとどまり、感情と場所利用の関係や場所利用を介した感情とプライベート空間の機能の関係については今後の検討課題として残されていた。すなわち、ある感情状態におかれたとき、我々は生活空間内のどのような場所を利用しやすいのか、そしてまたこうした場所利用によってどのような心理的機能を充たしているのか、に関しては明らかではない。そこで、本稿では、泊・吉田(1999)に続いて、感情状態

に応じてどのような場所が利用されやすいのかを示し、さらに、そうした場所利用を介してどのようなプライベート空間の機能が充足されるのか、を因果モデルを設定する形で明らかにすることを目的とする。

方 法

調査対象 東京・千葉・神奈川・茨城の国立及び私立大学の学生計274名(男子138名、女子136名 平均年齢20.4歳)。

調査内容 場所利用の測定：場所利用の測定に用いた項目は、Kramer(1995)やTomari & Hori(1997)の研究から筆者らと大学生2名を含む計5名で、大学生の生活空間の中で身近だと考えられる場所を選択し、32の場所のリストを作成した(Table 1 参照)。なお、感情と場所利用の関係を多角的に検討するために、32の場所項目については回答方法の異なる2種類の質問紙を用意し、それぞれ別々の調査対象に実施した。

質問紙Aでは、まず32の場所項目について、“ここ最近(2, 3ヶ月間)の間に、それらの場所をどの程度利用したか”を5段階で評定させた。次に、プライベート空間の7機能については、泊・吉田(1998b)によるプライベート空間機能尺度の7つの下位尺度を項目として使用した。具体的には、ゆっくり休息できる時間や空間(緊張解消)、課題や考え事など、何かに集中できる時間や空間(課題への集中)、自分を見つめ直したり、混乱した状況や気持ちを整理する時間や空間(自己内省)、親しい人と共有する時間や空間(率直なコミュニケーション)、気分転換できる時間や空間(気分転換)、日常性から解放される時間や空間(情緒的解放)、普段の自分とは別の自分を表現できる時間や空間(自己変身)、の7項目について、“最近どの程度確保できているか”を4段階評定させた。さらに、感情については、寺崎・岸本・古賀(1992)による多面的感情状態尺度及び落合(1993, 1994)による生活感情リストの中から、大学生が普段の生活の中で身近に経験すると思われる感情を16項目(付表)選択し、各感情項目について、“最近それらの感情をどの程度感じているか”を7段階で評定させた。

質問紙Bでは、泊・吉田(1999)による感情16項目の因子分析の結果において、「抑うつ感」・「いらだち」・「無気力感」・「拘束感」の4因子に最も高く負荷していた項目を、各因子の代表的な感情状態と考え6項目選択した。それらは、楽しいとき・むしゃくしゃするとき・やる気に満ちているとき・忙

Table 1 32の場所の項目に関する因子パターン行列

		N=165									
因子名と項目番号及び項目名	平均値(SD)	F 1	F 2	F 3	F 4	F 5	F 6	F 7	F 8	R^2	
第1因子：アウトドア空間											
23. 旅先(観光地)	1.68(0.96)	.53	-.18	.10	-.02	.02	-.12	.04	.22	.39	
24. 自然の山や森林などの静かな場所	1.88(1.07)	.53	.27	.00	.06	.07	-.08	.04	.08	.38	
14. 公園	1.96(1.13)	.53	.16	-.32	.13	-.10	.05	.05	.23	.49	
19. 海	1.47(0.93)	.50	-.16	-.02	-.11	.00	.17	.14	-.12	.35	
5. 風景のきれいな場所	2.46(1.11)	.46	.22	-.02	.10	.12	.08	.03	.12	.31	
13. スポーツ施設	1.70(1.03)	.42	.07	-.08	-.04	.19	-.10	.09	-.11	.26	
第2因子：没頭できる空間											
6. 書店	3.53(1.13)	-.09	.55	.19	.22	-.08	.22	.09	.00	.45	
9. 図書館	2.62(1.27)	.05	.51	.16	-.06	.00	.04	.09	.05	.30	
27. 散歩道, 通りなど	2.58(1.25)	.17	.46	.04	.21	-.17	.06	.08	.14	.34	
32. 静かな早朝の時間	1.84(1.17)	.22	.36	.14	.08	.11	.01	-.19	-.15	.28	
第3因子：日常性の空間											
30. 大学	4.11(1.08)	-.16	.06	.62	.07	.06	-.11	-.07	.18	.47	
29. お風呂	4.40(0.90)	.05	.12	.61	.14	.07	.07	-.03	-.01	.41	
7. 通学に利用する乗り物	3.99(1.37)	-.02	.09	.51	-.03	-.03	.02	.10	-.07	.29	
第4因子：1人になれる空間											
28. 自分だけの部屋	4.27(1.21)	-.03	.01	-.01	.85	.09	-.09	-.06	-.01	.75	
1. 1人になれる自分だけの場所	3.56(1.27)	.03	.18	.08	.58	-.11	.05	-.08	.04	.40	
11. ひっそりとした深夜の時間	3.44(1.37)	.05	.05	.07	.35	-.10	.25	.16	.00	.23	
第5因子：交友できる空間											
3. 居酒屋	2.53(1.16)	.05	-.04	.00	-.03	.61	.02	.10	.23	.44	
4. 仲の良い友人(恋人)の家	2.87(1.39)	.06	-.03	.02	-.06	.45	.04	-.04	-.03	.22	
第6因子：匿名的な空間											
2. 見知らぬ人が行き交う都会の雑踏	3.18(1.06)	-.02	.12	.04	-.07	.15	.49	-.07	.01	.28	
22. クラブ・ディスコ	1.27(0.85)	.13	-.04	-.17	.13	.24	.42	-.02	.12	.31	
12. ショッピングモール	3.08(1.16)	.07	.20	.34	-.08	-.04	.41	.15	.04	.36	
16. サークル・クラブ室	2.16(1.45)	.21	-.05	.01	-.15	.09	-.39	.02	.00	.23	
第7因子：娯楽的な空間											
8. 娯楽施設(パチンコ店やゲームセンター等)	2.08(1.23)	.10	.14	-.05	-.09	-.06	-.09	.62	-.01	.44	
25. カラオケハウス(ボックス)	2.39(1.27)	.11	-.07	.21	.03	.35	-.30	.47	.04	.50	
15. コンビニエンスストア	3.92(1.19)	.14	.02	.18	.14	.31	.19	.40	.02	.36	
第8因子：リフレッシュできる空間											
10. 映画館	2.04(1.26)	.03	.01	-.05	.02	.04	-.01	-.04	.51	.26	
17. 行楽地(テーマパークなど)	1.68(0.90)	.28	-.28	.09	-.16	-.16	-.06	.29	.40	.47	
31. 喫茶店	2.40(1.27)	.12	.23	.17	.02	.18	.18	.26	.37	.37	
除外項目											
18. 自分で運転する乗り物	2.59(1.66)	.19	-.26	.02	-.02	.22	.16	.22	-.07	.23	
20. 理容室	2.05(1.02)	.09	.20	.11	-.01	.34	.23	.00	.32	.33	
21. 用を足すこと以外の目的で利用するトイレ	1.64(1.05)	.05	.25	-.05	.04	-.01	.17	.23	.03	.15	
26. 習い事などの教室	1.49(1.10)	.01	.26	.01	.06	.14	.09	.01	.29	.18	
因子寄与		1.86	1.61	1.51	1.48	1.28	1.23	1.21	1.05	11.23	
因子寄与率(%)		5.81	5.03	4.72	4.63	4.00	3.84	3.78	3.28	35.09	

付表 最近の感情に関する項目(16項目)

【抑うつ感】 4. 落ち込んでいる 8. 楽しい* 13. 陽気である* 14. 憂うつである 15. つらい 16. 悩んでいる 【無気力感】 3. 毎日が退屈である 6. さびしい 7. 将来のことが不安である 10. やる気に満ちている*	【いらだち】 2. いらいらする 5. むしゃくしゃする 12. 不機嫌である 【拘束感】 1. 忙しい・追いまわられている 9. だるい 11. 束縛されている
---	--

※項目の末尾に付いている*印は逆転項目であることを示す。

しいとき・落ち込んでいるとき・毎日が退屈であるとき、の6項目である。そして、この6項目に対し、“それらの感情状態のときにどのような場所を利用することが多い(好む)か”と尋ね、31の場所項目(32の場所項目から静かな早朝の時間・ひっそりとした深夜の時間の2項目を除き、その他の場所を付加)の中から1つだけを選択させた。

手続き 調査は1998年1月に上述の各大学に質問紙を郵送し、担当教官により講義時間の一部を利用して集団実施された。なお、質問紙Aには165名(男子79名、女子86名)、質問紙Bには109名(男子59名、女子50名)が回答した。

結果と考察

1. 感情状態と場所利用の関係

分析に先立って、感情16項目と場所32項目のグルーピングを行った。まず、感情16項目については、泊・吉田(1999)の因子分析の結果に従い、4つの下位尺度毎に合成得点を算出した。なお、各下位尺度の名称と項目例及びCronbachの α 係数は次の通りである。「抑うつ感(落ち込んでいる、憂鬱である等を含む6項目)[$\alpha = .82$]」、「いらだち(むしゃくしゃする、いらいらする等計3項目)[$\alpha = .85$]」、「無気力感(やる気に満ちている、毎日が退屈である等の計4項目)[$\alpha = .64$]」、「拘束感(忙しい、束縛されている等を含む計3項目)[$\alpha = .52$]」。項目数の関係から拘束感の α 係数が若干低いものの、他の3尺度の α 係数は十分高い値を示しており、分析には耐えうるレベルにあると判断できる。次に、場所の32項目については、因子分析(共通性の初期値にSMCを用いて反復推定を行った主因子法)を行い、8因子を抽出した後Varimax回転を行った(Table 1)。各因子の名称と代表的な項目例を挙げ

ておく。第1因子：「アウトドア空間(旅先、風景のきれいな場所等)」、第2因子：「没頭できる空間(書店、図書館等)」、第3因子：「日常性の空間(大学、お風呂等)」、第4因子：「1人になれる空間(自分だけの部屋、1人になれる自分だけの場所等)」、第5因子：「交友できる空間(居酒屋、仲の良い友人(恋人)の家)」、第6因子：「匿名的な空間(見知らぬ人が行き交う都会の雑踏等)」、第7因子：「娯楽的な空間(娯楽施設等)」、第8因子「リフレッシュできる空間(映画館、行楽地等)」。場所の8因子は各因子に含まれる項目数が2つだけのものがあること、項目のグルーピングが目的であり、尺度化を目指してはいないことから、 α 係数についての記載を省くことにした。次に、因子分析の結果に基づいて、32項目の変量を最も負荷量の高い因子にグルーピングする形で8つの因子グループに分類し、各因子グループの項目をそれぞれ足し合わせて合成得点を算出した。そして、これらの合成得点と最近の4つの感情状態の関係についてPearsonの相関係数を算出した。その結果をTable 2に示す。Table 2より、まず、落ち込んでいる・憂うつである等の抑うつ感を感じている人についてみると、居酒屋・仲の良い友人(恋人)の家といった交友できる空間、大学・お風呂等の日常性の空間、さらに自分だけの部屋等を含む1人になれる空間をあまり利用していないことが分かる。すなわち、気分が沈んで元気がないといった抑うつ感を感じている時には、大学・居酒屋等の対人コミュニケーションが要求される場所や、自らの感情状態に注意が向きがちな1人になれる場所をあまり利用していないことを示す。泊・吉田(1999)より、抑うつ感を感じる時は自己内省・気分転換の機能を求めること、この2つの機能に加え、特に率直なコミュニケーションの機能を充たしているほど抑うつ感を感じる事が少なく、さらに

Table 2 8つの場所群の最近の利用頻度と最近の感情状態4因子との相関係数

場所の8因子及び項目	最近の感情状態4因子			
	F1：抑うつ感	F2：いらだち	F3：無気力感	F4：拘束感
F1：アウトドア空間				
5. 風景のきれいな場所			-.170*	
23. 旅先(観光地)		-.159*	-.156*	
F2：没頭できる空間				
F3：日常性の空間				
29. お風呂	-.172*		-.175*	
30. 大学	-.200*	-.157*	-.181*	
	-.208**	-.157*	-.292**	
F4：1人になれる空間				
1. 1人になれる自分だけの場所	-.161*	-.210**		-.270**
28. 自分だけの部屋	-.212**	-.271**		-.224**
				-.278**
F5：交友できる空間				
3. 居酒屋	-.252**		-.208**	
4. 仲の良い友人(恋人)の家	-.247**		-.208**	
	-.162*			
F6：匿名的な空間				
2. 見知らぬ人が行き交う都会の雑踏		.190*		
F7：娯楽的な空間				
8. 娯楽施設(ゲームセンター等)			.155*	
25. カラオケハウス(ボックス)	-.177*			
F8：リフレッシュできる空間				

N=165

* $p < .05$ ** $p < .01$

それらの機能は1人になれる空間や交友できる空間で充たされやすいことが分かっている。従って、抑うつ感に悩まされやすい者は交友できる空間・1人になれる空間の利用が少ないために、率直なコミュニケーション・自己内省・気分転換の機能を十分に充たすことができていないと考えられる。

次に、いらだちを感じている者は、自分だけの部屋等の1人になれる空間や旅先・大学・お風呂等をあまり利用しないことを示しており、その一方で、見知らぬ人が行き交う都会の雑踏はよく利用していることを表している。泊・吉田(1999)より、いらだちを感じる時は自己内省・気分転換の機能を必要とし、それらの機能を充たしているほどいらだちを感じる数が少なく、またそれら2つの機能は1人になれる空間や旅先等のアウトドア空間で充たされやすいことが分かっている。さらに、都会の雑踏は気分転換したいときに利用されることも示されている。従って、いらだちを感じている者は1人になれる空間や旅先の利用が少ないために、自己内省や気分転換が十分に充たされていないと考えられる。また、いらだちを感じている者が都会の雑踏等の匿名的な空間を利用するのは、気持ちの切り替えを図る

ためであると考えられよう。

引き続き、無気力感を感じている人の場合は、交友できる空間(居酒屋)や日常性の空間(大学・お風呂等)、風景のきれいな場所等をあまり利用しないことを示し、その一方で、ゲームセンター等の娯楽施設をよく利用していることを表している。泊・吉田(1999)より、率直なコミュニケーション・気分転換・情緒的解放・課題への集中の機能が充たされているほど、無気力感に悩まされることが少なく、それらの機能は交友できる空間や1人になれる空間だけでなく、大学(日常性の空間)や風景のきれいな場所(アウトドア空間)で充たされやすい。同様に、娯楽施設(ゲームセンター等)は気分転換のために利用されることが非常に多いことも示されている。すなわち、無気力感を感じている者は、大学に通ったりお風呂に入ったりといった、いわば日常のルーティン化された活動をする気力に乏しいことを示し、ましてや居酒屋で友人らと騒いだり、あるいは風景のきれいな場所や旅先等のアウトドア空間まで出かけるだけのエネルギーにも欠けることを物語っている。むしろ、無気力感に苛まれている者は、ゲームセンター等の娯楽施設で気を紛らわせずには

いられないのかもしれない。おそらく、日常性の空間や交友できる空間を利用しないことが率直なコミュニケーション・気分転換・情緒的解放・課題への集中等の機能を充たせないことにつながり、そのことが、かえって無気力感を強めているものと考えられる。

最後に、拘束感を感じている人の場合は1人になれる空間(自分だけの部屋・1人になれる自分だけの場所)を利用していないことが分かった。拘束感を感じるときには気分転換・緊張解消が求められ、それらの機能を充たしているほど拘束感が低減されること、さらに気分転換・緊張解消の機能は1人になれる空間でより充たされやすいことを示す(泊・吉田, 1999)。このことから、1人になれる空間をよく利用している者ほど気分転換や緊張解消の機能を充たしていると考えられ、それゆえに拘束感にとられることが少ないと言えよう。

2. 感情状態に応じた場所利用の頻度

Table 3は代表的な感情状態6項目に対する31の場所の選択頻度を、8因子毎に集計した結果である。まず楽しいときについてみると、楽しいと感じるときには居酒屋・仲の良い友人(恋人)の家といった交友できる空間が最もよく利用されており、娯楽的な空間(娯楽施設・カラオケハウス等)やリフレッシュできる空間(映画館・行楽地等)も多く選ばれている。すなわち、楽しいときにはその高揚した気分を他者と分かち合えるような空間が利用されたり、趣味や娯楽のための場所が利用されているのであ

る。次に、むしゃくしゃするときには1人になれる空間や娯楽的な空間の選択頻度が高く、アウトドア空間・匿名的な空間も多く選ばれている。泊・吉田(1999)より、むしゃくしゃする等のいらだちを感じるときには、自己内省・気分転換の機能が求められることが分かっている。このことから、苛立っている状態のときには1人になれる空間や娯楽的な空間の中でそうした機能を充たそうとしていられると考えられる。さらに、やる気に満ちているときには、図書館等の没頭できる空間が最もよく利用され、その他に自分の部屋等の1人になれる空間もよく利用されているようである。本研究の調査対象者は大学生であるため、やる気に満ちているときは自分1人で専有できるような閉じた空間の中で自らの課題に集中して取り組んでいるのであろう。次に、忙しい・追いつまわられているときには、1人になれる空間の利用が多く、大学・お風呂等の日常性の空間も多く選ばれている。この結果は、忙しいと感じるときには緊張解消の機能が最も必要とされ、この機能は1人になれる空間やお風呂(日常性の空間)で充たされやすいこと(泊・吉田, 1999)から理解できるであろう。さらに、落ち込んでいるときには1人になれる空間が最も多く選ばれているが、一方で、交友できる空間もよく利用されることを示している。落ち込んでいるときには率直なコミュニケーション・自己内省の機能が求められ、前者は交友できる空間で、後者は1人になれる空間で充たされやすい(泊・吉田, 1999)。従って、意識的か無意識的かはさておき、こうした場所利用をすることが率直なコミュニ

Table 3 感情状態に応じて利用される8つの場所群の選択頻度(%)

場所の8因子	感情状態の6項目					
	1. 楽しいとき	2. むしゃくしゃするとき	3. やる気に満ちているとき	4. 忙しい・追いつまわられているとき	5. 落ち込んでいるとき	6. 毎日が退屈である・つまらないとき
アウトドア空間	9.2	15.6	13.8	18.3	6.4	12.8
没頭できる空間	1.8	1.8	26.6***	10.1	7.3	6.4
日常性の空間	0.9	5.5	13.8	17.4*	1.8	7.3
1人になれる空間	3.7	25.7***	11.9†	33.0***	40.4***	13.8*
交友できる空間	41.3***	8.3	3.7	3.7	21.1***	11.9†
匿名的な空間	7.3	13.8	12.8	6.4	7.3	12.8
娯楽的な空間	16.5*	21.1***	5.5	3.7	8.3	15.6†
リフレッシュできる空間	14.7†	1.8	3.7	0.0	2.8	12.8
その他の空間	3.7	5.5	7.3	6.4	3.7	5.5
欠損値	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9	0.9
χ^2 値	251.1***	102.9***	53.5***	153.4***	269.1***	31.3***

N=109

† $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

ケーション・自己内省の機能を充たすことにつながっていると言えよう。最後に、毎日が退屈であるときには1人になれる空間が最もよく利用されており、それに続いて娯楽的な空間・交友できる空間等も多いことが分かる。また、残差分析の結果は有意ではないものの、アウトドア空間・匿名的な空間・リフレッシュできる空間といった一種の非日常的な空間も多く選ばれていることを示している。毎日が退屈なときには、何よりも情緒的解放が必要とされ、この機能は1人になれる空間や交友できる空間で充たされやすい。また、映画館(リフレッシュできる空間)・旅先(アウトドア空間)・ディスコ(匿名的な空間)等も情緒的解放の場として利用されることを示す(泊・吉田, 1999)。よって、退屈なときには自分1人だけの場所で気分的な解放感を味わう場合もあれば、何らかの刺激を追い求めて外の開かれた空間を求める場合もあることを示していると言えらう。

3. 感情状態・場所利用・プライベート空間の機能の確保に関する因果モデルの検討

本研究では、感情状態の違いによって利用される具体的な場所が異なるであろうと考え、さらにどのような場所を利用するかによってプライベート空間のどの機能が充たされるかも異なるであろうと想定した。そこで、感情状態→場所利用→プライベート空間の機能の確保という順序で因果モデルを構成し、パス解析を行った。より具体的には、第1段階

では感情状態の4つの下位尺度得点を説明変数に場所利用の8因子を基準変数とする重回帰分析を行い、第2段階では感情状態及び場所利用の各因子毎の合成得点を説明変数に用い、プライベート空間の確保度7項目を基準変数とする重回帰分析を行った。その結果を示したのがFig.1である。まず、抑うつ感を感じる者は居酒屋・友人(恋人)の家といった交友できる空間をあまり利用しないようであり、そうした場所利用を介して率直なコミュニケーション・情緒的解放の機能を充たすことは少ないと言えよう。また、抑うつ感は8つの場所利用を介さずに、直接に有意な負のパスが課題への集中とつながっていた。すなわち、抑うつ感を感じているときには、どのような場所を利用しようとも課題や考え事になかなか集中できないことを意味する。次に、いらだちについては、場所利用の8因子のいずれにも有意なパスが見られず、有意な負のパスが直に気分転換の機能に結びついていることを示した。いらだちを感じているときには自己内省・気分転換の機能が求められるが、この結果は、そうした感情状態のときにどのような場所利用を行おうと、気持ちの切り替えを図ることはなかなか難しいことを表している。さらに、拘束感を感じている者ほど、自分の部屋・1人になれる場所等の1人になれる空間を利用しない傾向があり、そうした場所利用を介して専有空間の3機能(課題への集中・自己内省・緊張解消)や情緒的解放・気分転換の機能を充たしているのではないと言えよう。むしろ、拘束感を感じてい

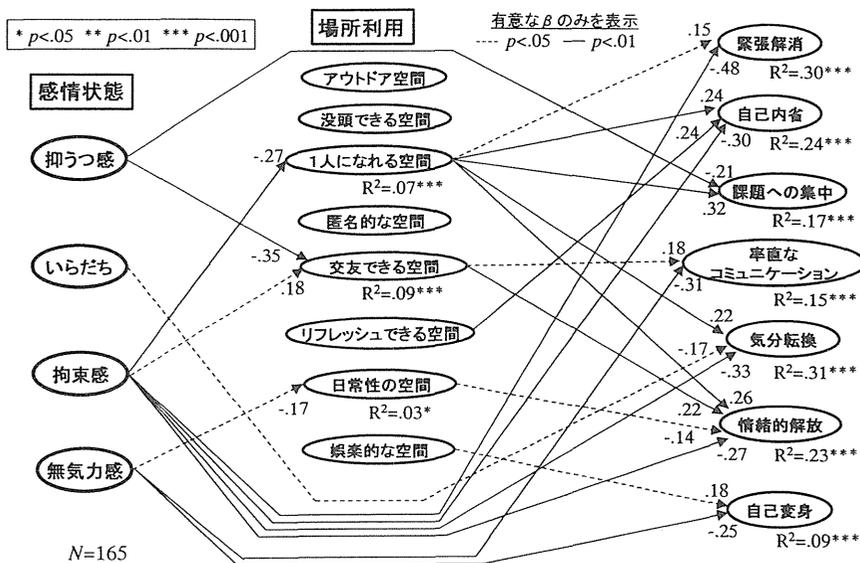


Fig. 1 感情状態・場所利用・プライベート空間の7機能に関するパスダイアグラム

るときほど居酒屋等の交友できる空間に出かけ、そうした仲間と気楽に打ち解けられる場所の利用を通じて率直なコミュニケーションを交わしたり、情緒的な解放感に浸っているのである。またさらに、拘束感は場所利用を媒介せずに、有意な負のパスが直接に緊張解消・気分転換・自己内省・情緒的解放の機能とつながっていることも示した。すなわち、拘束感を感じているときには、どのような場所に出かけようと、そうした場所利用が休息や気分転換、日常性からの解放感をもたらさず、また混乱した気持ちや状況の整理にもつながらない場合があることを物語っている。最後に、無気力感を感じるときほど大学・お風呂・通学の乗り物といった日常性の空間を利用することは少なく、むしろそうした日常的な場所から離れることで情緒的な解放感を味わっているようである。またその一方で、無気力感に陥っているときには、場所利用にかかわらず、率直なコミュニケーション・自己変身の機能を果たすことが難しいことを表している。

ところで、アウトドア空間・没頭できる空間・匿名的な空間に関しては、感情状態及びプライベート空間の機能と無関係であった。その理由としては、次のことが考えられる。まず、アウトドア空間・匿名的な空間に関しては、これらの空間は大学生の生活空間としては少し範囲が広く、なかでも旅先や海等は利用頻度がかなり低く、めったに利用されていないことを示す。従って、これらの場所は生活の中で感じるネガティブな感情に応じて利用するほど、プライベート空間の機能を果たす場所として十分に位置づけられていないと考えられる。また、没頭できる空間に関しては次のことが考えられる。すなわち、大学生にとって書店・図書館・散歩道といった没頭できる空間は、日常的な空間としてごく普通に生活の中に組み込まれているため、抑うつ感・いらだち・無気力感・拘束感等のネガティブな感情状態に応じて利用されることはあまりないのであろう。また、リフレッシュできる空間・娯楽的な空間は、特定の感情状態とは無関係であったが、前者は自己内省の機能を果たし、後者は自己変身の機能を果たしていることが明らかとなった。おそらく、大学生にとっては映画館・行楽地(リフレッシュできる空間)や娯楽施設・カラオケハウス(娯楽的な空間)といった場所は、ごく身近な生活空間として日常の中に溶け込んでいると考えられる。それゆえに、それらの社会的施設は日頃の感情のあり方とは無関係に利用されながらも、次第に特定のプライベート空間の機能を果たす役割を担ってきたものと考えられよう。

結 論

本研究は、泊・吉田(1999)に続いて、感情状態に応じてどのような場所が利用されるのかを明らかにし、そうした場所利用を行うことがどのようなプライベート空間の機能を果たすことにつながっているのかを検討した。その主な結果について、泊・吉田(1999)の知見をふまえながら整理しておく。まず最初に、抑うつ感を感じている者ほど交友できる空間・日常性の空間・1人になれる空間の利用が少ないことが示された。すなわち、交友できる空間で親しい人と率直なコミュニケーションを交わしたり、また、1人になれる空間で自己内省・気分転換の機能を果たすことができている人ほど、悩みを抱え込んだり、憂うつな気持ちになったりといった抑うつ感を抱きやすいと言えよう。次に、いらだちを感じている人の場合は、1人になれる空間や旅先・大学・お風呂等をあまり利用していないことが分かった。泊・吉田(1999)より、1人になれる空間やお風呂は緊張解消や自己内省の場として機能し、旅先は気分転換・情緒的解放の場、大学は率直なコミュニケーションの場として利用されやすいことが見出されている。よって、こうした場所を利用することで十分に緊張解消や気分転換を図ることができない人ほどいらだちを感じやすいのである。そしてまた、こうしたいらだちの感情に悩まされているときには、“見知らぬ人が行き交う都会の雑踏”等の匿名的な空間で気分転換を図っているようである。さらに、無気力感に陥っている人に関しては、大学・お風呂等の日常的な空間や居酒屋等の対人的な交流が求められる空間を利用することは少ないものの、ゲームセンター等の娯楽施設で気分転換を図っている様子が伺われる。最後に、拘束感にとらわれている者は、1人になれる空間を利用することが少ないことを表していた。1人になれる空間は、自己変身以外の全てのプライベート空間の機能を果たす場所であり、こうした場所でプライベート空間の機能を十分に果たせないことが、かえって拘束感を高めることにつながっているのであらう。

次に、6つの代表的な感情状態に応じてどのような場所が利用されやすいのかを直接に検討した結果について考察する。まず、楽しいとき・落ち込んでいるときには交友できる空間が利用されやすいことが明らかとなった。この結果は、Brown(1992)の知見や泊・吉田(1999)の結果と一貫している。また、落ち込んでいる・忙しい・むしゃくしゃするときには、いずれも1人になれる空間が利用されること、やる気に満ちているときは課題に集中できるような

場が求められること、さらに毎日が退屈なときには自分を解放できる空間が必要とされる等の結果も、泊・吉田(1999)の結果と一致した傾向を示している。すなわち、私たちは意図するとせざるに関わらず、生活空間内の様々な場所を、プライベート空間の3空間7機能を果たす舞台として、目的に応じて利用し分けていると言えよう。

さらに、感情状態→場所利用→プライベート空間の7機能に関する因果モデルについてパス解析を行った結果をみると、抑うつ感を感じる者は交友できる空間の利用が少なく、そうした場所の利用を通じて率直なコミュニケーションや情緒的解放の機能を果たすことは少ないことが分かった。泊・吉田(1999)より、率直なコミュニケーションや自己解放できる空間の3機能を果たしているほど、抑うつ感に悩まされることが少ないという結果が示されている。従って、そうしたプライベート空間の機能が果たせる交友の場を確保することが、抑うつ感から解放されることにおいて有効だと考えられよう。また、拘束感を感じている者は、交友できる空間を利用することで率直なコミュニケーション・情緒的解放の機能を果たしているものの、1人になれる空間の利用を通じて専有できる空間の3機能(課題への集中・緊張解消・自己内省)や気分転換・情緒的解放の機能を果たすことは少ないことを示した。よって、それらのプライベート空間の機能を果たせるような形で1人になれる空間をうまく利用することが、拘束感からの解放を得ることにつながるものと考えられる。最後に、無気力感を感じている者は大学・お風呂等の日常性の空間を利用することが少ないようであり、そうした場所利用を回避することで日常性から離脱し、情緒的な解放感を得ていることが明らかとなった。泊・吉田(1999)では、無気力感を感じている者で、とりわけ毎日が退屈だと感じている者ほど情緒的解放を求めていることを明らかにしている。これらの知見をもとに考えると、無気力感を感じている者は、情緒的解放の機能を充足できるような場所利用を行っていると言えるであろう。

上記以外の感情状態や場所利用のパス解析の結果は、感情状態が場所利用を媒介とせずに直接プライベート空間の機能に結びついたり、あるいはまた、感情状態と場所利用がプライベート空間の7機能の確保をあまり強く規定していないことを示していた。しかしながら、感情状態・場所利用・プライベート空間の7機能はそれぞれ独立に測定しており、互いの変数を規定し合うような関係性にはないことを考えると、これらの3変数が一貫した方向で互いに結びついているという結果を示したことが重

要であると思われる。さらに言えば、場所利用の行動はプライベート空間の7機能を果たすために行われるよりも、むしろ一般的には、何らかの財やサービスの提供を受けるために道具(手段)的に利用されることの方が多く、非常に多彩な要因によって規定される性質を持った現象である。しかし、プライベート空間の7機能を媒介概念として位置づけることで、感情状態に応じた場所利用の行動がうまく説明できることを考えれば、この結果は有用な知見を提供していると考えてよいだろう。

今後は、こうしたプライベート空間の機能がどのようなパーソナリティと関係しているのか、すなわちパーソナリティによって求めるプライベート空間の機能が異なるのかという問題等を検討する必要があるだろう。

引用文献

- Brown, B.B. 1992 The ecology of privacy and mood in a shared living groups. *Journal of Environmental Psychology*, **12**, 5-20.
- Krämer, B. 1995 Classification of generic places: explorations with implications for evaluation. *Journal of Environmental Psychology*, **15**, 249-258.
- 落合良行 1993 大学生における生活感情の分析 筑波大学心理学研究, **15**, 177-183.
- 落合良行 1994 青年期における生活感情リストの作成 筑波大学心理学研究, **16**, 119-127.
- 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 1992 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究, **62**, 350-356.
- Tomari, S. & Hori, H. 1997 Favourite places and environmental self-regulation. Joint meeting of the 45th conference of the Japanese group dynamics association and the second conference of the Asian association of social psychology, Kyoto, Japan. 209.
- 泊 真児・吉田富二雄 1998a プライベート空間の心理的意味とその機能—プライバシー研究の概観と新たなモデルの提出— 筑波大学心理学研究, **20**, 173-190.
- 泊 真児・吉田富二雄 1998b プライベート空間機能尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 日本社会心理学会第39回大会発表論文集, 90-91.
- 泊 真児・吉田富二雄 1999 プライベート空間の機能と感情及び場所利用との関係 社会心理学研究, **15**, 77-89.